

二〇一八年度大学入試センター試験 解説 〈現代文〉

第1問 評論

ありもとのりふみ 有元典文・岡部大介 『デザインド・リアリティ——集合的達成の心理学』

〔総括〕

第1問の評論は、比較的新しい文章からの出題で、人間にとっての基本的条件として「現実をデザインするという特質」について具体例を通じながら論を展開している。文章量が昨年のものより一割程度増えており、読むのに少し時間がかかったかもしれない。また、問3が新傾向の問題。問題文に付された図について四人の生徒の対話が交わされる中、空欄に正しいものを入れる設問が出題された。二〇二一年に、入試改革として行われる大学入学共通テストを意識した問題だと思われる。ここで戸惑った受験生がいたかもしれない。

問1の漢字は、例年どおりの出題パターンで、基本〓標準レベルの問題。問2は直前の原因の箇所を捉えて解答する問題、問4は「指示語」に気をつけて解く問題、問5は、傍線部の後に展開していく箇所を丁寧に押さえて解く問題で、それぞれ標準レベルだ。文章の表現と構成を問う問6は、(i)が「適当でないもの」を選ぶ問題、(ii)が「適当なもの」を選ぶ問題なので、注意が必要である。

〔解説〕

問1 漢字問題 基本〓標準

(ア)の「意匠」はここでは「色や形、模様などに新しい工夫をめぐらすこと」の意。(イ)・(ウ)は「訓」の漢字を「音」で解答する問題。意味を理解していないと解けない点で、日頃から漢字に関して多角的な勉強を積み重ねておくことが望ましい。(イ)の正解③「踏襲」は「先人のやり方をそのまま受け継ぐこと」の意。(エ)の「摂理」は「自然界を支配している(神の)法則」の意。(オ)の「洗練」と正解の②「洗浄」は基本漢字なので、正解を選ぶのは容易なはず。

傍線部(ア)～(オ)に相当する漢字を含むものを、それぞれ一つずつ選べ。

- | | | | | | | |
|-----|-----|------|--------|--------|------|---------|
| (ア) | 意匠 | ① 高尚 | ◎ ② 巨匠 | ③ 交渉 | ④ 昇格 | ⑤ 抄本 |
| (イ) | 踏み | ① 急騰 | ② 登記 | ◎ ③ 踏襲 | ④ 陶器 | ⑤ 搭乘 |
| (ウ) | 乾いた | ① 緩和 | ② 歓迎 | ③ 果敢 | ④ 干拓 | ◎ ⑤ 乾電池 |
| (エ) | 摂理 | ① 切斷 | ② 折衝 | ③ 窃盜 | ④ 雪辱 | ◎ ⑤ 摂取 |
| (オ) | 洗練 | ① 旋律 | ◎ ② 洗淨 | ③ 独占 | ④ 変遷 | ⑤ 潜水艦 |

- 正解 (ア) 1 (イ) 2 (ウ) 3 (エ) 4 (オ) 5

問2 理由説明問題 標準

傍線部A「講義」というような、学生には日常的なものでさえ、素朴に不変な実在とは言にくい。」とあるが、それはなぜか。その理由の説明として最も適当なものを、一つ選べ。

第1段落から始まる講義という具体例を通じて、筆者は「講義とは何か」を問うている。その答えとして、傍線部Aの結論にたどり着くわけなので、ここで問われている理由は、傍線部の前後に書かれていると判断する。

○因果関係の二つのパターン

因果関係を表すパターンは次の二つしかない。

- ① 原因↓結果
- ② 結果(結論)↑原因(理由説明)

↓①の形が通常「因果関係」と呼ばれるものであり、②はそれが倒置した形だ。

特徴としては、①の場合、原因は結果の直前に書かれることが多く、②の場合は、結果(結論)を述べた後、文章が展開していく中で原因(理由説明)が行われることが多いことだ。

今回の文章を見ると、傍線部の直前に「講義の語りの部分にだけ注目してみても、以上のような多様な捉え方が可能である。世界は多義的でその意味と価値はたくさんさんの解釈に開かれている」と書かれており、これが傍線部の直接的な原因であることがわかる。選択肢を見ると、②がこうした内容をまとめたものになっている。「世界が多様性をもっており、その捉え方はさまざまに異なる」という内容は正解の②以外の選択肢には書かれていないので、ズバリ正解とわかる。

①は、「受講者の目的意識と態度」が変化するとあるが、ここで大切なのは世界の捉え方の多様性なので×。
 ③は、「授業者の教授上の意図的な工夫」でもなければ、「学生の学習効果」の話でもないので×。
 ④は、「学生にとって授業の目的」の明確化が問題ではなく、また、「多義性を絞り込まれることによって」という方向は筆者の主張とは逆なので×。
 ⑤は、「学生のふるまいが大きく変わってしまう」とあるところが①と同様間違い。また「特定の場におけるひとやモノや課題の間の関係」が「再現できるものではない」というのは傍線部の理由とは全く無関係なので×。

正解 ⑥ ②

問3 空欄補充問題 標準

傍線部B「図1のように」とあるが、次に示すのは、四人の生徒が本文を読んだ後に図1と図2について話している場面である。本文の内容をふまえて、空欄に入る最も適当なものを、一つ選べ。

センター試験の現代文で「空欄補充問題」が出題されたことはこれまで一度もない。しかも、問題文に付された図について四人の生徒の対話が交わされる中、空欄に正しいものを入れる設問なので、完全に新傾向の問題だ。これは二〇二一年に、入試改革として行われる共通テストを意識した問題だと思われる。

こうした問題を解く際に気をつけるべきは、

- ① まず、本文読解をベースとすること。
- ② 次に、問題文の生徒たちの会話の流れの中で文脈判断して正しいものを選ぶこと。

特に今回の場合は、①の本文読解をおろそかにすると、選択肢を見た時に迷ってしまうことになる。傍線部Bは第10段落の「図1のように」に引かれているが、本文をそのまま読み進めていこう。

ここでは、具体例として「湯飲み茶碗に持ち手をつけると珈琲カップになる」ことを通じて、筆者は「モノの扱い方の可能性」が変化することを述べている。まとめると、

○具体例(図1)

湯飲み茶碗に持ち手をつけると珈琲カップになり、指に引っ掛けて持つことができるようになる(第10段落)。

←

○抽象化した結論

モノから見て取れるモノの扱い方の可能性、つまりアフォーダンスの情報が変化する(第10段落)。

モノはその物理的なたずまいの中に、モノ自身の扱い方の情報を含んでいる…(第11段落)。

ふるまいの変化はこころの変化につながる(第13段落)。

「容器に関してひとびとが知覚可能な現実」そのものが変化しているのである(第13段落)。

ここで述べられていることをまとめると、「モノは形の中に情報を含んでいるので、その形を変えられることによって、扱い方の可能性が変化し、それは同時に知覚可能な現実そのものが変化することになる」ということだ。「湯飲み茶碗」が「珈琲カップ」に形状変化することで起こるのは、扱い方(ふるまい)の変化であり、同時にこころ(知覚)の変化でもあるという内容。

問題文の生徒たちの会話の流れを見てみよう。四人の生徒たちの話し合いの中で、生徒Cの会話に空欄がある。「デザインを変えたら扱い方を必ず変えなければならないというわけではなくて、ということになるのかな」。それを受けた生徒Dが「『今ある現実の別のバージョンを知覚することになる』ってことなんだ」と答えている。

この文脈で空欄に入る内容は、さきほどの本文の流れで見たように、「モノの扱い方の可能性」についてであり、「扱い方(ふるまい)の変化」と「こころ(知覚)の変化」の両方について触れていることである。

選択肢を見ると、その両方に触れており、正しいものは⑤「形を変える以前とは異なる扱い方ができることに気づく」である。

③と④は「扱い方」に触れてないので×。①は「各自の判断に任されている」が×。ここでは「各自の判断」について問題になっているのではない

い。②は「無数の扱い方が生まれる」が×。ここでは変化の数を問題にしているわけではない。

正解 7 ⑤

問4 理由説明問題 標準

傍線部C「このことは人間を記述し理解していく上で、大変重要なことだと思われる。」とあるが、それはどうしてそのように考えられるのか。その理由として最も適当なものを、一つ選べ。

まず傍線部中の指示語の指し示すものを正確に捉えることが大切だ。

●傍線部中、あるいは傍線部の直前に指示語がある場合、まずは指示語問題として解く。

これはセンター現代文で最頻出であるにとどまらず、どの大学の現代文においても重要な解法の鉄則であり、大切なパターンといえる。傍線部Cの冒頭の指示語「この」が何を指し示しているかという点、

人間はいわば人間が「デザインした現実」を知覚し、生きてきた

=

この(ことは…)

ここで大切なことは、筆者が「」でくくっている人間が「デザインした現実」が何を意味するのだが、それは同じ第15段落を遡っていくと記述してあるのでまとめてみよう。

○人間が「デザインした現実」

私たちの住まう現実、…文化的意味と価値に満ちた世界を生きている。それは…レディメイドな世界ではない。…文化的実践によって変化する、

自分たちの身の丈に合わせてあつた私たちのオーダーメイドな現実である。

こうした内容をまとめてあり、傍線部Cの理由説明になっている選択肢は③だ。「レイメイド」を「既存」、「あつた私たちに合わせた」を「改変」、「身の丈に合わせて」を「生きやすいように」と言い換えてあるところにも注意したい。

①は、「現実」を「人間にとって常に工夫される前の状態」と捉えているところが×。人間にとっての現実とは、「自分たちの身の丈に合わせてあつた私たちに合わせた」のオーダーメイド」なのである。

②は、「自然のもたらす形状の変化に適合し、新たな習慣を創出した」が×。①同様、人間にとっての現実とは、「自分たちの身の丈に合わせてあつた私たちに合わせた」のオーダーメイド」なのである。自然の摂理を工夫して乗り越えてきたのが人間の現実である。

④は、「特定の集団」の意味が不明。本文で述べられている「価値中立的な環境ではない」という主張は、「文化的意味」や「歴史」が一意に定まったレイメイドなものではないという意味であつて、「現実とは、特定の集団が形づくられた場」とは書かれていないので×。

⑤は、後半の「デザインによって人間の創造する力をふまえることが重要」が×。傍線部冒頭の「このこと」が指し示しているのは、人間が「デザインした現実」なのであつて、「人間の創造する力」ではない。指示語の指し示すものが間違っているという点で、⑤を選んだ人はもう一度指し語パターンを確認してほしい。

正解

8

③

問5 内容説明問題 標準

傍線部D「『心理学(しんりダッシュ)の必要性』とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、一つ選べ。」

第19段落冒頭にある傍線部Dの直後に「を指摘しておきたい」とあるように、傍線部の内容は、次の文から具体的に説明されているのでまとめてみよう。

- 1 人間の、現実をデザインするという特質は、人間の本質的で基本的な条件である。
- 2 人間性は、社会文化と不可分のセットで成り立っている。
- 3 私たちのこころの現象は、文化歴史的条件と不可分の一体である「心理学」として再記述されていくであろう。

4 「心理学」は「文化心理学」のことである。

5 1～3の人間の基本的条件が理解された後、「ア」の記載は必要なくなる。

以上をまとめている選択肢は①である。「心理学」に「ア」が必要なのは、従来の「心理学」では捉えきれない部分があるからであり、その捉えられていないところをカバーするために必要な心理学が「心理学」であるという主張だ。

②は、後半の「人間の心理を捕捉して深く検討する」のが「心理学」であるというのが間違い。「心理学」は、「捕捉」ではなく、文化的歴史的条件と不可分のものである。

③は、後半の「心理学実験室」以下が、本文の内容と全く関係なく異なるので×。

④は、従来の「心理学」と「心理学」とを比較して、「心理学」の方が必要であるとしている点が×。筆者は、二つの心理学の違いを必要度の違いで論じているのではなく、本質的に違うものとしている。もちろん、現時点では「心理学」こそが、人間の本質的で基本的な条件である「現実をデザインする」という特質をふまえた学といえる。

⑤は、「人間の心性」と「変化する現実」とを「集合体として考えていく」のが「心理学」としていることが間違い。「人間の心性（こころの現象）」は、「文化的歴史的条件と不可分」なのであり、そうした心性と文化とを一体化して考えるのが「心理学」である。人間の「現実」というのは、人間がデザインしたものであり、「人間の本質的で基本的な条件」のことである。

正解 9 ①

問6 文章の表現と構成を問う問題 (i) 応用 (ii) 標準

(i) この文章の第1～8段落の表現に関する説明として適当でないものを、一つ選べ。

「適当でないもの」という点を見落とさなければ、「消去法」で解ける。

①は、書かれているとおり第1段落は、会話文から始まって状況説明になっていることを本文で確認できる。特に問題のない説明になっているので、正解ではない。

②は、「音声の物理的な現象面に着目」の箇所が検討材料だが、講義の語りの部分は、確かに「音声の物理的な現象」と言えるので問題ない。これ

も正解ではない。

③の「新しい古典」についての説明は第⑥段落にはないので、正しい説明かどうか判断はできない。そこで、いったん保留して次の④を検討する。
 ④は、第⑧段落の「私たち」についての説明だが、ここで筆者が「私たち」という主語を使ったのは、広く人間全体のこれまでの活動について述べたいからである。たとえば、第⑤・⑥段落中でも、「これまで私たちはこのことばを拡張した意味に用いてきた」「私たちがデザイン」という概念をどう捉えようとしているのかを示そうと思う」などと使われており、第⑧段落において使われた「私たち」が「筆者と読者とを一体化して扱い、筆者の主張に読者を巻き込む」というほどの特別な効果があるわけではない。これが適当でないと判断できるので正解となる。
 翻って、③の「新しい古典」についての説明は正しいと解釈することになるが、筆者が本当に選択肢に書かれた意味で「新しい古典」という言葉を使ったかどうか百パーセント本文を根拠として正しいと言えないところがやや疑問ではある。

正解 10 ④

(ii) この文章の構成に関する説明として最も適当なものを、一つ選べ。

この設問に関しては、問2・問3の解説でもふれたように、筆者は個別の例を提示して具体的に述べた後に、抽象度を高めてその例を捉え直して主張していくということを繰り返しており、正解は④とわかる。

①は、「最後に該当例を挙げて統括を行っている」が×。そんなことはされていない。
 ②は、④の説明と紛らわしいが、個別の具体例の「共通点」↓「一般化」した結論、という形で主張を提示しているわけではなく、筆者の主張にそった個別の例が先に提示されたのち、抽象度を高めた論を展開しているという流れになっている。
 ③は、「結論部で反対意見への反論と統括を行っている」が×。こうしたことは行われていない。

正解 11 ④

第2問 小説 井上荒野の「キュウリいろいろ」(『キャベツ炒めに捧ぐ』より)

〔総括〕

第2問の小説は、五年連続で女流作家の作品であり、設問数、設問形式は昨年どおり。文字数も昨年とほぼ変わらない。作者の井上荒野は現在活躍中であり、文章や内容から受ける印象は、昨年の野上弥生子のような古びた感じはしないものの、夫と子を亡くした妻の心境を中心とした内容で、受験生にはなかなか共感を得られにくいかもしれない。

問1の語句の問題は、「本文中における意味」を問われているが、いずれも辞書に載っている慣用表現であり、語彙力が試された。問2は夫との関係を把握した上で、郁子の心情を正確に捉える問題。問3も電車での出来事を通じた郁子の心情を問う問題。問4も郁子の心情を問う問題だが、紛らわしい選択肢があるので注意したい。問5の理由説明問題は選択肢が三行ある問題で、要素が多く、また問4と同様紛らわしい選択肢があるので、丁寧に解かなければならない問題。問6は適当でないものを二つ選ぶ出題形式であり、選択肢に書かれた内容を本文で確認して消去法で解く問題であった。

〔解説〕

問1 語句問題 (ア) 標準 (イ) 標準 (ウ) 標準

傍線部(ア)～(ウ)の本文中における意味として最も適当なものを、それぞれ一つずつ選べ。

「本文中における意味」を問う問題ではあるが、あくまで「辞書の定義を優先して解く」というのは例年どおりの鉄則パターン。文脈判断に頼ると間違える可能性がある問題が出題されるので、今年の問題に限らず、こうした慣用表現には日ごろからいろいろな媒体を通して慣れ親しんでおき、語彙力を増強してほしい。下手に文脈に戻して判断すると間違える可能性がでる問題が出題されている。

(ア)の「腹に据えかねた」は、「心中の怒りを抑えきれない。我慢ができない」の意で、②「我慢ができなかった」が正解。文脈的には、①の「本心を隠しきれなかった」や、⑤の「気持ちが静まらなかった」なども入るが、ここはあくまで辞書の定義とおりの解答になる。

(イ)の「戦きながら」は、「恐怖や不安などで震える」の意で、③「ひるんでおびえながら」が正解。「恐怖におののく」などと使う。②の「驚いてうろたえながら」が紛らわしいが、辞書の定義として、こうした意味はない。

(ウ)の「枷が外れる」の「枷」は、「行動や心理の妨げになるもの」の意味なので、「枷が外れる」は⑤「制約がなくなる」が正解である。ここでも他の選択肢は文脈的に入ると思っても、辞書の定義に照らすと間違っているのです。

問2 理由説明問題 標準

正解 (ア) 12 (イ) 13 (ウ) 14 ⑤

傍線部A「写真の俊介が苦笑したように見えた。」とあるが、そのように郁子に見えたのはなぜか。その理由として最も適当なものを、一つ選べ。

今回のセンター小説は、全文ではなく、原典の一節からの出題のため、前書きで説明されている場面状況を捉えてから読解を開始する必要がある。前書きによると、三十五年前に息子を亡くした主人公郁子が、以来夫婦二人暮らしを経て、夫が亡くなった次の年に初めて迎えるお盆の場面から始まる出来事を描いている。傍線部Aに出てくる「写真」とは、亡くなった夫俊介の写ったものだ。その夫との間では、三十五年前に亡くなった息子を巡っての葛藤があったことが冒頭から語られている。冒頭から傍線部Aまでの話の流れをまとめてみよう。

郁子は亡くなった息子に帰ってきてほしくて、毎年キュウリで馬を作ってきた。それは迷信だったが、郁子は息子があの世から帰ってきて一緒に連れていってほしかった。しかし、夫はその姿を見て、からかってきたので、郁子は腹を立てては憎まれ口をたたいてきた。いちどだけ夫が「別れようか」と言ったことに対して、「絶対に別れない」と言う郁子だったが、自分を置いて亡くなった夫のことを「逃げた」と感じた郁子は悲しみ以上に「怒り」を覚えた。そして今、亡くなった夫と息子の写真を見ながら、キュウリの馬を二人分作った郁子は、夫の写真を見ながら「馬に乗ってきて、そのままずっとわたしのそばにいればいい」と思う。

こうした話の流れのあとに、傍線部Aがきている。ここで「写真の俊介が苦笑したように見えた」理由が問われているわけだが、「そのように郁子に見えた」理由が問われていることに注意しよう。

郁子のこの場面での心情は、直前に書かれているように、「馬に乗ってきて、そのままずっとわたしのそばにいればいい」に象徴されている。それを夫が生きていて聞いたならば、またいつものようにからかうのであろうが、亡くなっている夫は写真の中で「苦笑したように見えた」。つまり、郁子の目には、かなうこともないわがままな願いをする自分のことを夫はあきれつつも笑って許してくれるに違いないという思いで写真を見たということだ。そうした説明になっているのは③。

①は、「夫を今も憎らしく思っている」が本文から読み取れない。夫が亡くなった時には「怒り」があったと書かれているが、一年経った現在は夫に息子ともども帰ってきてほしいと思っている。

②は、「夫は後ろめたさを感じながら」の箇所が間違っている。夫が「後ろめたさ」を感じる理由もなく、本文からも読み取れない。

正解の③は、「かつては息子の元へ行きたいと言ひ、今は息子も夫も自分のそばにいてほしい」と言う「身勝手」さが本文に書かれていることを、まず確認しよう。後半の「夫はあきれつつ受け入れて笑ってくれるだろう」という説明は郁子の心情として適している。問題なく正解。

④は、紛らわしい選択肢だが、「夫は今も皮肉交じりに笑っているだろう」とする根拠に欠ける。③との違いは、夫の「苦笑」が自分の身勝手さを「受け入れて」られているのか、それともただ「皮肉交じり」のものなのかの判断だ。

○苦笑Ⅱ心の中では、とまどいや不快の気持ちをもちながらも、事態を受け入れて仕方なく笑うこと。

この「苦笑」の定義からわかるように、正解の③のように「あきれつつ受け入れて笑ってくれるだろう」と郁子には見えた判断すべきだ。「以前からかったときと同じように、夫は今も皮肉交じりに笑っている」のでは、「苦笑」に見えるという表現はおかしい。

⑤は、「夫に甘え続けていたことに今さら気づいた自分」という説明が間違い。郁子はそんなふうに自分を捉えていない。

正解 15 ③

問3 心情説明問題 標準

傍線部B「少し離れた場所に座っていた若い女性がぱつと立ち上がり、わざわざ郁子呼びに来て、席を譲ってくれた」とあるが、この出来事をきっかけにした郁子の心の動きはどのようなものか。その説明として最も適当なものを、一つ選べ。

これも問2同様、郁子の置かれている場面状況をしっかり捉えることが大切だ。「この出来事をきっかけにした郁子の心の動き」が問われているので、傍線部B以降の内容を押さえていく。42～47行目に書かれている三十数年前の同じような出来事の回想を正確に捉えられれば正解に至る。選択肢を検討していこう。

①は、「三十数年前にも年配の夫婦が席を譲ってくれたことを思い起こし」の部分はず正し。次に、「他人にもわかるほど妊娠中の妻を気遣っていた夫」も正しい。ただし、ここは読み間違いが起る可能性があるので気をつけよう。

「他人にもわかるほど」という語句は「気遣っていた」にかかっている。ここを「他人にもわかるほど妊娠中」と取り間違えてしまうと×にする可

問4 心情説明問題 標準

能性が出てくるので注意だ。本文では、「郁子のお腹はまだほとんど目立たない頃だった」と書いてある。そこで、「他人にもわかるほど妊娠中」ではないとして×する受験生がいたかもしれない。ここは、4行目に書かれているように、「奥さんじゃなくてご主人の様子を見ていればわかります」という箇所の説明として、「他人にもわかるほど（妊娠中の妻を）気遣っていた夫」になっているわけだ。そして最後の「その気遣いを受けていたあの頃の自分に思いをはせている」という説明も正しいので、これが正解だ。

②は、最後の「物足りなく思っている」が本部に根拠のない説明で×。

③は、「若くて頼りなかった夫のことを懐かしんでいる」が×。正解の①で見たように、夫は妊娠した郁子のことをとっても気遣っていたのであり、「若くて頼りなかった」という説明は当たらない。

④は、「不思議な巡り合わせを新鮮に感じている」という説明が×。ここでの中心は、かつての夫と自分の様子を回想することであり、巡り合わせに対するものではない。

⑤は、「時の流れを実感している」が×。④で説明したように、ここでは「時の流れ」を実感することが郁子の心の動きの中心ではない。

正解 ①

16

傍線部C「郁子はまるで見知らぬ誰かを見るようにそれらを眺め、それが紛れもない自分と夫であることを何度でもたしかめた。」とあるが、その時の郁子の心情はどのようなものか。その説明として最も適当なものを、一つ選べ。

郁子の眺めた写真についての説明は56行目から始まっている。十数枚の写真を見ながら、郁子の感じたことは、「強い驚き」だった。

○息子を亡くした後の、悲しみにくれた辛く苦しい二人の生活

⇔ 二つの間のギャップに「強い驚き」を感じる

○写真に写っている幸福そうな夫の顔や郁子自身の微笑、という紛れもない事実

ここで見られるギャップから、傍線部Cにあるように、その写真に写っている夫と自分の姿は「まるで見知らぬ誰か」であるように感じられたわけである。正解は④。まず、前半は正しい事実に関する説明で問題ない。それに続く「自分も夫も知らず知らず幸福に向かって生きようとしていた」が、本文の「植物が伸びるように人間は生きていく以上は笑おうとするものだ」に対応していてOK。そして、写真に写る自分たちの笑顔を見てギャップを感じ「強い驚き」を覚えた説明として「思いがけないものだった」という点も本文に合致する。

①は、後半の「そこにはどこかの幸せな夫婦が写っているとしか思われなかった」が×。傍線部Cにあるように、強い驚きに襲われた郁子は、写真を何度も眺めた後に「それが紛れもない自分と夫であることを何度でもたしかめた」とあるので、最終的には写真は自分たち夫婦であることを確認している。

②は、「案外自分も同様に振る舞い、夫に同調していた」が×。そうしたことを認識し、「思い知った」わけではない。郁子には写真の自分たちはまるで他人にしか思えなかったのである。

③は、「時には夫のたくましさに助けられ」が本文に根拠がない。また、「写真に写った自分たちのそのような様子は容易には受け入れがたく思われた」も完全におかしい。

⑤は、前半は正しい説明だが、「互いに傷つけ合った記憶があざやかであるだけに」という原因の箇所が本文にない説明になっているので×。選択肢中に置ける因果関係には、十分注意して解答しよう。

○選択肢の説明が、「本文に書かれていない、あるいは、間違った原因」から結果に結びつけられている場合、その結果の説明がいくら正しくても×になる。

正解

17

④

問5 理由説明問題 応用

傍線部D「その必要はありませんと郁子は答えた」とあるが、このように答えたのはなぜか。その説明として最も適当なものを、一つ選べ。

三行にわたる選択肢なので、一つ一つの要素を注意深く本文と対照させて正解に至る必要がある。ここはいくつか紛らわしい選択肢があるので、消去法で解いていこう。

①は、「夫の実家のある町並みを経て、その幻のあまりのあざやかさから」までは問題ない。しかし、最後の「夫をいとおしむ心の強さをあらためて確認することができた」の箇所が×。ここまでの問いの解説で見てきたように、本文中に描かれている郁子は、生前の夫に対して単純に「いとおしむ心の強さ」だけを持って生きてきたわけではない。それどころか、息子の死というものに遭遇して、夫に腹を立てたり、また夫の死に怒りを覚えたりしながら、心に葛藤を抱えながら生きてきた。したがって①は×。

②も、「自分の心が過去に向けられ、夫の姿が今や生き生きとよみがえり」までは問題ないが、「大切なことは記憶の中にあるのだと認識することができた」が間違い。郁子は、過去の回想や記憶に頼って生きようとしているわけではない。107行目に書かれている、「ずっと長い間——夫を憎んだり責めたりしている間も——自分の中に保存されていた」という描写は、郁子が夫と過ごしてきた長い時間の積み重ねを実感したということの説明なので、「大切なことは記憶の中にある」のではなく、「過去から現在に至る時の積み重ねの中にこそ二人の大切なことがある」と郁子は知ったのである。③が正解の選択肢だ。前半、中盤まで問題ない説明がなされているが、中でも「夫の若々しい姿が自分の中に刻まれていたことに気がついた」の箇所と、後半の「そのような自分たち夫婦の時間の積み重なりを実感することができた」の箇所が本文の104～109行目までの描写内容と一致する。

④は、「ようやく許す心境に達し」が書かれていない内容で×。また、「自分の新しい人生の始まりを予感することができた」という説明も本文からはまったく読み取れないので×。

⑤は、「今は彼のことをいたわってあげたいという穏やかな心境になった」が本文から読み取れない説明で×。また「自分と夫は重苦しい夫婦生活からようやく解放されたのだということ」を、若き夫の幻によって確信することができた」もまったく本文に書かれていない内容で×。

正解 18 ③

問6 表現に関する説明問題 応用

この文章の表現に関する説明として適当でないものを、二つ選べ。(順不同)

「適当でないもの」を選ぶ問題なので、「消去法」で解いていこう。

○センター小説の「文章の表現に関する説明」問題の解法

選択肢中の「○行目の『○○』は」の箇所は正しいので、とにかく指示された該当行に戻って本文を読み、選択肢に書かれている判断が正しいか

どうかを検討し、○×(時に△)を付けて「消去法」で解いていこう。

また、「二つ選べ」とある場合は、一つは易しく、もう一つが難しい、という場合が多いので、特に二つ目の正解を選ぶとき、もう一度すべての選択肢を見直すことを忘れないようにしよう。

①は、「『』」のない部分は郁子の思考の流れに沿って文章が展開している」という箇所が検討箇所になる。本文を見ると、たしかに「」のない部分は、「郁子の思考の流れに沿って文章が展開している」と言えるので正しい。

②は、「これは郁子のその場での率直な思いであることを印象づける表現である」が検討箇所。「郁子」と三人称的に書くよりも、「わたし」という一人称を使った方が、より主体としての率直な思いを印象づけられるのは間違いないので、正しい。

③は、「()」の中に入れることによって、その内容が他人に隠したい郁子の本音であることが示されている」が検討箇所。該当の行に戻って郁子の心情を見てみよう。まず、56・57行目の()の中には書かれているのは、郁子の本音と言えるものだ。内容的に見ても同級生(石井さん)からの希望に反する写真を持ってきているので、ここでは「隠したい郁子の本音」であると判定できる。次に、87行目の箇所は、石井さんのこぐ自転車に二人乗りをさせてもらっている郁子の本音を吐露したものだ。ここで()の中に書かれているのは、さすがに初対面の男性の腰に腕を巻きつけることは恥ずかしくてできないという本音であり、それは相手にも隠したいものだと言える。最後に、97行目だが、ここが間違っている。()の中に書かれているのは、石井さんの好意に感謝したという郁子の心情ではあるが、それが本音だとしても「隠したい」わけではないはずなので、間違った説明といえる。これが一つ目の正解。

④は、「これによって、夫のさまざまな姿に郁子が気づいたということが表現されている」が検討箇所だが、これは特に問題なく正しい説明と言える。

⑤は、86行目の「名所旧跡」に付けられた「傍点は、石井が、あえて本来の意味を離れ、冗談めかしてこの語を使ったことを示している」の箇所が検討箇所。ここで石井という人が「名所旧跡」と言ったのは、夫の俊介が若い日を過ごした土地であることを郁子に示すための冗談であり、正しい。

⑥は、93行目の「のだった」や、105行目の「ものだった」は、「回想において改めて思い至ったことを確認する文末表現である」という説明は正しいと判断できるので、「前者には郁子の悔やんでいる気持ちがあらわれており、後者には懐かしむ気持ちがあらわれている」が検討箇所にあたる。

93行目の「のだった」に「郁子の悔やんでいる気持ちがあらわれて」いるかどうかと言えば、この箇所ではずいぶん前に郁子が夫の実家を一度訪れたきりだったという遠い過去であることを言うために「のだった」と使っていることは確認できるが、「郁子の悔やんでいる気持ち」を本文から読み取ることができない。したがってこれが二つ目の正解となる。

ちなみに、105行目の「ものだった」の箇所は、かつて俊介から昔話を聞かされた時のことを思い出して「その時代の俊介に会ってみたい、と思ったものだった」と回想しているシーンで使われており、ここでの郁子の心情は選択肢の説明どおり「懐かしむ気持ち」と言える。

正解 19・20 ③・⑥ (順不同)